

新年あけましておめでとうございます。

2018(平成30)年の年頭にあたり、産総研地質調査総合センター(GSJ)を代表して謹んでご挨拶申し上げます。

昨年、GSJはその前身の地質調査所の創立(1882(明治15)年)から135周年にあたり、記念事業の一環としてGSJシンポジウムを積極的に開催いたしました。「富士山5,000 mの科学—駿河湾北部の地質と自然を探る—」(9月静岡と10月東京で開催)、「自然由来重金属類データ整備に向けて」(11月東京)、「地圏資源環境の研究ストーリー」(12月東京)の各シンポジウムに多数ご来場いただき、改めて御礼申し上げます。GSJは歴史を重ねながら、常に社会的な要請に基づいて最先端の研究成果を創出してゆくことが使命であり、そのことを皆様にご理解いただく努力を怠ることなく、今後も研究活動を進めてまいります。

2017年のプレス発表成果から

冒頭では、昨年のGSJシンポジウムについてご紹介しましたが、社会の皆様へ研究成果のポイントを迅速にお届けする手段として、「プレス発表」があります。GSJでは一昨年からは、プレス発表を格段と意識的・積極的に活用することを開始いたしました。GSJが主体となるプレス発表と、他機関が主体となり共同で発表したものを区分いたしますと、2016年は8件のプレス発表と1件の共同プレス発表、2017年は9件のプレス発表と8件の共同プレス発表を行いました。2017年のプレス発表からGSJの成果をいくつか紹介いたします。

3月30日、「高知県地域の表層土壌評価基本図を公開—重金属類の暴露リスク評価に基づく土壌評価図—」を発表しました。地圏資源環境研究部門の原 淳子ほかによる成果であり、GSJではこれまで宮城県、鳥取県、富山県、茨城県の各地域の表層土壌評価基本図を公表しており、今回で5件目となります。11月の自然由来重金属類データ整備にむけたGSJシンポジウムでは、自然由来重金属類が、環境・経済両面でのリスクとなり、そのリスク評価のために表層土壌評価基本図のような基盤情報整備を強く求める声がありました。

5月10日、地質の日に「日本全国のウェブ地質図を完全リニューアル—新区分による高精度20万分の1日本シームレス地質図が完成—」を発表しました。これまでの凡例数386から一気に2,400超へ高精度化したことが画期的です。GSJでは2005年から20万分の1日本シームレス地質図をウェブで公開してきましたが、その凡例はGSJの100万分の1日本地質図(1992年発行)の凡例を基に作成したものでした。これを改訂した今回の成果は2010年に立ち上がった斎藤 眞率いる編集委員会の7年越しの大きな成果でした。

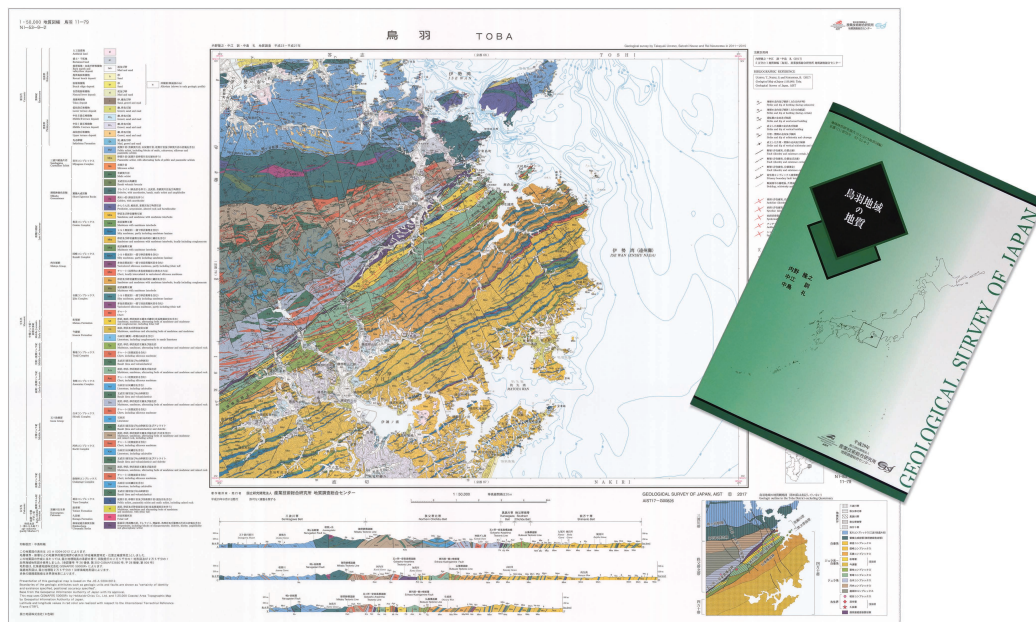
6月29日、「日本列島の地殻変動の謎を解明—フィリピン海プレートの動きが東西短縮を引き起こす—」を発表しました。これを発表した地質情報研究部門の高橋雅紀は本GSJ地質ニュースで「東西日本の地質学的境界」を連載していますので、読者にはおなじみと思います。この研究成果は地質調査研究報告 Vol.68, No.4に掲載されました。高橋は地質の普及啓蒙活動に意欲的で、2017年はNHKスペシャル列島誕生ジオ・ジャパンやブラタモリにも出演し、また一般公開、地質情報展、ジオ・サロンなどで独自に作製した地質模型を駆使して活躍しました。今年もどこかで皆さまに地質を語る姿があることでしょう。

7月24日「香川をつくった1億年の歴史—香川県初の5万分の1地質図幅「観音寺」を刊行—」、8月28日「日本列島の成り立ちを記録する北アルプスの地質を解明—富山新潟県境・泊地域の5万分の1の地質図を刊行—」、

9月14日「恐竜化石はなぜ鳥羽で見つかったのか？—志摩半島の地殻変動の歴史を編んだ5万分の1地質図幅「鳥羽」を刊行—」の3つはGSJの基幹事業である5万分の1地質図幅整備の成果です(第1図)。それぞれの図幅

の興味を引く特徴がプレス発表のタイトルに表わられています。皆様に大いに活用いただければ幸いです。

この他にも興味深いプレス発表を多く行っておりますので、ぜひGSJのWEBサイトで御覧いただければ幸いです。



第1図 5万分の1地質図幅「鳥羽」。

ジオバンク寄付金制度の開始

2018年にむけて

2017年、GSJは135周年記念事業として、新たに募集特定寄付金制度 GeoBank(ジオバンク)を開始いたしました。産総研では、これまで、一般的な寄付金について受入を行ってきており、GSJでは2011年にGSJの元職員廣川 治氏のご遺族からいただいた寄付金を活用して「廣川研究助成」として毎年、若手研究者の短期海外派遣を支援しております。今回新たに立ち上げた募集特定寄付金 GeoBankではGSJが、ジオ・データ(データサービス)とジオ・スクール(人材育成)に用途を特定して寄付金を募集するもので、GSJのミッション推進の強化を図り、その成果を社会に還元することを目指すものです。開始してまだ一年が経ちませんが、個人及び企業から貴重なご寄付をいただき、その活用を進めているところです。GeobankについてはGSJのWEBサイトにて紹介しておりますので、ご覧いただければ幸いです。

2001年に産総研が発足し、地質調査所が地質調査総合センターとなって17年が経過しました。毎年、新人が入り人も入れ替わっておりますが、そこは悠久の時間を扱う地質の強みで、研究者同士の連携も17年スパンは昨日今日の感覚で、ずっと繋がっている気がします。新しい人はAIなどの先端技術を視野に入れていると思いますし、先人の脚で築いた地質調査技術も綿々と繋がり発展しています。2018年、GSJがどのような成果を出せるかは研究者一人一人の知恵と努力にかかっていますが、その動機となる社会の皆様の期待は大きいものだと思っております。今年もまた、いっそう期待されるようにGSJを広報し、研究活動を盛り上げていきたいと思っておりますので、皆さま方からのご支援ご鞭撻を引き続きよろしくお願いいたします。